

ニセコイ 春ちゃんルート

黄金のゆっぴ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

春と楽が付き合っただのだ！

ちなみに亜黄田県Ⅱ秋田県です

ハジメテ

目次

ハジメテ

私の名前は小野寺春。凡矢理高校の高校2年生です。

今、私には一条楽先輩という大切な恋人がいます。

そんな先輩と今日、なんと亜黄田県に旅行に行くことになりました
…!?

なんでも一条先輩の付き人（龍さんだったかな…?）から、付き
合った祝いだから、2人で田舎でのんびり過ごしてきてください!!と
のことだった。

正直亜黄田県に行ったことがないからすごく不安だけど、一条先輩
とならどこへ行くとなってもとつても嬉しい!

そんなことを思っていると

「おーい!春ちゃん!!」

この声は…一条先輩だ!

いつものことだが、周りに人が沢山いるのに大声で叫んでこつちに
来るのはやめて欲しい、とても恥ずかしいからさ…でも私も呼んだ方
がいいよね、これ…

私も一条先輩を呼ぶ

「一条せんぱーい!!早く来てくださーい!!あなたの愛しの彼女がここ
で待ってますよー!!」

やっぱりまだ素直に手を振れない。でも、こうゆうことにも徐々に
なれて行けばいつか…

今思えば、私たちが付き合うことになったのは凡矢理和菓子コンテ
ストの時、私が先輩に思いを伝えたからなんだよね

◇?◇?◇?◇?◇?◇?◇?◇?

あの時私は一条先輩とお姉ちゃん（小咲）だけでコンテストに優勝
ができると感じていた。そして同時に私の存在が必要ないのではな
いかと思ってしまった。

胸が茨で締め付けられるような気持ちになって、咄嗟にステージ裏
に駆けて行ってしまった。

「どうせ私なんて…必要ないよね」

「そんなことあるわけねえだろ!!!」

「——!!」

先輩は走っては私のもとへ来ていた。

そして私に

「戻って来てくれよ！春ちゃん!!俺も小野寺も…春ちゃんがないとすごく寂しいし、近くにいて欲しいんだよー」と言ってくれた。

あの時すごく嬉しかったな…

そしてその瞬間、私は一条先輩に告白をするんだって決めただよね。

私は先輩のもとにいつて思いっきり抱きつき、

私は先輩の耳にこう呟いた。

「私を助けてくれた王子様は先輩だつて知ってたんですよ…：…今まで黙ってすいませんでした。そして先輩の…：…バカ。先輩が優しくすぎるから私を、先輩しか愛することのできない人にしてしまったんですよ…！もう先輩しか好きになることが出来ません…」

「私と付き合ってください…!!」

私は先輩に告白をした。今思うととても恥ずかしいこと言ってるな。うん

そして先輩はこう言ってくれたんだ

「うん…：…いいぜ…：…春ちゃん」

その返事を聞いた週間、私は感動して泣いてしまった。

まさか成功するなんて思ってたからね。

「本当にありがとうございます…：…先輩！」

「実は…：…さ、俺も春ちゃんのこと好きなのかもしれないって思ってたんだ。お菓子作りの時にオレのことめっちゃ気遣ってくれた

り、自分よりも他の人を大事にしてくれる姿見た時に、こんな子が彼女になってくれたら嬉しいな　って感じたんだ。」

先輩は私のことをそこまで見てくれていたんだ…：…とっても嬉しいな

そして2人で会場に戻っていき、コンテストは見事優勝することが

出来た。

◇?◇?◇?◇?◇?◇?◇?◇?◇?

と、私が昔のことを考えていると先輩は私の前まで来ていた。

「うわっ！びっくりした！」

「わりいな、春ちゃん。結構待たせちゃったか？」

「い、いえ、5分くらいしか待っていないから大丈夫ですよ。て言うか、まだ予定の時間より10分も早いのに、そんなに謝らなくて大丈夫です。」

「お、おう そうか。てか、まさか春ちゃんの方が先に着いてるなんてな。てつきり俺が最初に着いて春ちゃんを待つてるもんだと思っていたぜ」

うっ…先輩と旅行行くのが楽しみすぎて予定より30分も前から待つてました！なんて恥ずかしくて言えない…どうしたものか…

「わっ、私は先輩が寝坊してもいいように早く来て連絡してあげただけです！感謝の印にアイスクリーム奢ってくれてもいいんですよ？」
「おう、お易い御用だ。んくと…お、あれアイスクリーム屋じゃねえか？」

何とか誤魔化せた…

先輩が指を指した方向には海の鮮やかな色で飾られた店があった。店の中にはアイスの絵っぽいものが並んでいる。

「行ってみようぜ！春ちゃん！」

私は先輩について行き、店の前まで着いた。近くで見たらアイスの種類ごとに絵を貼っていたようだ。

「おっ、ここのアイスクリーム沢山種類あるじゃねえか！レモンにイチゴ、ソーダにチョコ…真夏のトロピカル味なんてもんもあるぜ！」

「先輩、この店に抹茶味ってありますか？」

「ん？ああ、もちろんあるぜ。あんまり売れてはいないが」

「なら抹茶味がいいです!!」

「お、おう。そういえば春ちゃん和菓子好きだもんなく。抹茶とか

もそりやあ好きに決まってるか。

おつちゃん！抹茶のアイスクリーム2つ頼むぜ！」

「えっ、先輩も抹茶にするんですか!？」

「ああ、春ちゃんが好きなものは俺も好きだからな。俺もちろん頼むさ」

「そ、そうですか…！ちょっと嬉しいかもです。」

本音で言うともつちや嬉しい。カップルで同じもの買って食べるの少し憧れてたからね。

「へいお待ち！おつ、可愛いカップルの子達だねえ〜！よし！君たちの分タダにしてやるよ！ほれ、この抹茶アイス2つ持っていきな！」

「お！ありがとなおつちゃん！」

「…ありがとうございます!!」

「なあに気にすんな！いいもん見して貰ったお礼だ！兄ちゃん、これかもこの可愛い彼女を大切にするんだぞ？」

「もちろんです！必ず幸せにします！」

やっぱり先輩はとってもいい人だ。私も先輩を幸せにできるように色々頑張らなくちゃ…ね！